

～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

『東松山戯曲賞』選評

選定委員：渡辺弘氏

果たしてどれくらいの戯曲が締切日までに集まるのかわからないのが公募の怖さであり楽しみなどころと言えますが、事務局にとってはヤキモキする時間でもあります。そして8月末、43作品という戯曲が事務局の机上に積み上げられました。予想よりも多くの作品が寄せられたことに戸惑う事務局を尻目に、ここから選考会に向けた私の戦闘の始まりでした。

片端から精読すること一ヶ月あまり。まず感心したのが全体にレベルが高いということがひしひしと伝わってきたことでした。「家族」「平成」というキーワードがあることもあり、家族にまつわる物語が多かったことも大きな特徴でもありました。「宇宙人」の登場や「宗教集団」など様々に意表をついた設定も含め、昭和から平成を生きる家族の姿がそこには生き活きと描写されていました。

次に待ち構えていたのが、演劇界の第一線で活躍される第一次選考者の方々の選考結果を見ながら、最終選考作品へ絞り込む作業でした。5作品にと当初は考えていましたが、意見が割れた作品をどうするのかなど、選考者との何度かのやり取りがあり、事務局と協議の結果、7作品を残すことにしました。

そして11月3日、最終選考会が開催の運びとなりました。現在、最も演劇界の先端を走っている4人の劇作家が、まず7作品への評価を述べるところから始まり、審査委員長長岩松了さんのリードの元、7作品から4作品に絞られました。ここから白熱の議論が行われたのですが、内容についてはそれぞれの選評を読んでいただくとして、各委員の家族観、歴史観、演劇観がぶつかり合う充実の時間となりました。最後は全員が「枇杷の家」を評価し、実際に演出を担当する瀬戸山美咲さんも「ぜひやりたいです！」との発言で3時間にわたる最終選考会は終了しました。

三人の女性の言わば「おしゃべり」で構成された「枇杷の家」は、まさに現在の大都市近郊に生きる人たちの姿が見事に映し出されています。力量ある女性作家が選ばれたことは実に喜ばしいことですし、この作品が今後どのように演出され観客の前に立ち現れるのか今から楽しみです。応募された皆さま、選考に尽力された皆さまに、改めて感謝申し上げます。